
メアンリとプレゼント・フレンズ（愉快的仲間達）

荒城 十晴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メアンリとプレザント・フレンズ（愉快的仲間達）

【Nコード】

N2013Y

【作者名】

荒城 十晴

【あらすじ】

メアンリは悩んでいる。なぜこんな人達に好かれるかを、魔族、水魔、獣人、ドラゴン、どうみても子供な種族、超絶美形な兄弟達、王子、おまけにや神さままで、なぜこんなことに。主人公はチートな強さ！ 最早なにも言うまい！ほのぼののんびりと過ごしたいのにいい！「私の平凡な生活は何処に？」

私が転生した訳（前書き）

前のがそんなに進んでないのに作ってみると言う暴挙…アハハ
許してちょ？

私が転生した訳

（ナレーション）：リサトリス国のシエルファーニ地方カルルハルン領地の領主家の四女、メアンリーネ・カルルハルンがこの物語の主人公、さあ、はじまりははじまり……「て、ちょっと待って、ナレーション。大事な事言い忘れてるわよ」

あつ、読んで下さっている読者の皆さんこんにちは、私はメアンリーネ・カルルハルンです。言い忘れてましたけど私転生者です。

前世では整体師で趣味は薬局で買った入浴剤をその日の夜に気分を選んでお風呂に入ってビールを飲んで寝ると言うお風呂しか女の部分出ないオッサンくさい女でした。

死んだ日も、薬局で入浴剤買って帰る所だったんだけど、途中で猫が車にひかれそうになって、それを助けて死ぬと言う 自分で言うのもなんだけど自己満足でどうしようもなく間抜けな死に方だった。薄れていく意識の中で猫が悲しげににやあと鳴いて私の意識は途絶えた。

次に起きたらとても大きなアクアリウムの中にいた。

「ここ、何処だろう」

「あ、お姉さん気がついた!」

白い服を来た少年が私の元に駆けてくる。

「ねえ、ここ、何処？君はだれ？」

「ああ、ここは転生のアクリウム。輪廻転生を待つ死者の魂の癒し場。そもでもって僕はこのアクリウムの管理人だよ」

「輪廻転生って…私死んだんだよね？」「お姉さんにはどうしようもない過ちをしてしまったんだ。」

「過ち…もしかすると」「君…あの時の猫？」

「うん…僕の軽率な行動のせいでお姉さんの人生を台無しにしてしまったんだ…」

その言葉をきいて私の中の色々な感情が混じり合う。それを責めた気持ちや、もつと色んな事をしたかった事、親孝行してあげられなかったこと、それらよりも一番の感情は自己満足でやっているのになぜこの少年は謝っていることに。

涙が出る。悔しい。なんで謝るの。したいこといっぱいあったのに。格好悪い自己犠牲だったのに。そんな感情が涙になって、叫びになって、理性なんて剥がれ落ちて、子供のように泣き喚くことしか出来なかった。その間少年はただひたすらに謝り続けた。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

その言葉が私の胸を酷く締め付けた。

泣いて、泣いて、泣いて、泣いて、泣いて、泣いて、泣いて、泣いて、叫んで、叫んで、叫んで、叫んで、1時間経ってようやく落ち着いた。

「元の世界には転生出来るの？」

「最低でも、他の世界で一回天寿を全うしないと戻れないよ」

「そうなんですか…」

「お姉さんには次の人生で前の記憶を残しておくね…」

「うん！湿っぽい空気やめやめ！女は度胸。あ、次の人生でも

女でお願いします」

少年はきよとした顔を始めはしていたが徐々ににこやかな笑顔を見せてくれる。

「お姉さんにはもつとサービスするね」

「次の人生であなたに逢える？」

「お姉さんが望むなら行けるよ」

「なら、次あった

時、この名前で呼んでちょうだい！」

（小百合）

その名前は前の名前 次の人生では、使えない。だけど、誰かに覚えておいてほしい。

「さあ、この水槽の中に入って」

私の眼下には一面

の水面が映っている。水底には色んな光が泳いでいる。

「それじゃあ、またね」

トプン！

私は入った。

そして、私は生まれ変わった。メアンリーネ・カルルハルンとして。

家族構成（前書き）

こんばんは、荒城です。
いやあ、書いたやつを保存しないで消した
もんだから遅れました

家族構成

そんな感じで私はカルルハルン家四女としてこの世界で生きている。
今は7歳になる。

今私は神さまから貰った力で機材を揃えて薬品を作ったりしている。

「メアンリ〜！お城で自分の執事と侍女を決めるんだって！」

「そうですよ、アレク兄様」

「あれえ、メアンリ知ってるの？私はドキドキするわ、ちゃんと作法できるかな？」

「大丈夫ですよ！クロア姉様」

「こ、怖いです。姉様……」

「怖がらないで、カFINE」

お城だあ、遊んだり、飯たらふく食うぞ〜」 「注意されない

ように気をつけるのよ、フェルト」 「どんな服着ようか、リリファ」

「メアンリに聞こうよ、リーザ」

「私、目の前に居ますよ？リリファ姉様、リーザ姉様」

さて、家族紹介しましょう。

一番最初のは、長兄、アレクシード・カルルハルン。歳は10歳です。

続けて長女、クロアフリーネ・カルル

ハルン。歳は9歳です。　そんで双子の次女、リーザ・カルルハル

ン。三女、リリファンナ・カルルハルン。共に8歳。　そして

引っ込み思案の五女、カFINEリカ・カルルハルン。6歳。わんぱ

く二男、フェルトスタ・カルルハルン。5歳。　会話に出てないけ

ど三男、ティアストラス・カルルハルン。4歳。　今はお昼寝の時間

です。

母の名前はテレジアンナ・カルルハルン。こんな大人数生んだすごい人です。

そして父の名前は、ギルジア・カルルハルン。ギルジアなんていか

つい名前だが、割と普通の体格で綺麗な人です。私は前の人生を忘れられない為、容姿は割と普通にしながら他の兄姉達と違いが浮き上がってしまっただけです。

私以外は全員、美女、美丈夫なんです。

私は母様の中から生まれ、生まれた時から精神が出来上がっているんで隠れていた。ちゃんと母様と父様の子である。

父様が浮気したと疑った時は赤子ながら「お前の娘だよ。」と言っただけだよ。

泣いている赤子が突然成人女性の声になったもんだから、神さまのお告げだと思っただけ。

前世で成熟した精神持ち合わせていたもんだから隠しとっただけでできなかったです。

ちょっとヘマを踏んじっただけです。

私が2歳になるころに、誰も見てないこと見計らってこっそりと育児の手伝いをしていて、それを見ていたアレク兄様とクロア姉様が母様達にチクっただけです。

チッ

バレちゃあしうがねえ。てな感じで洗いざらい吐きました。父様と母様疲れてたんです。

そこに仏心出してのんきに、（うふふ、まるで、おとぎ話に出て来るようなお手伝い妖精みたいね、私。はあと）なことやってたんです。

そこで私は商品開発をさせて頂いています。主に医薬品とか、作ります。

どうやって作ると言えばあの神さまの力です。
いやあ、転生チートってすげー、てな感じな感想しか出ないね。
主に魔法とか、

趣味で入浴剤作ったりしてるんだ。

さて、家族構成はこんな所でいいかな？

次話に続くよ。

まあ、こんな人生でも幸せなんですよ。

兄姉達の衣装を合わせて決めて、マナーを確認して、王都に行く準備をしている所です。

「メアンリ、未来の執事と侍女を決めるのって具体的に何するんだ」アレク兄様が聞いてくる。

「ああ、簡単に言えばホームステイさせるんですよ。」

4年に一度あるイベントで、金の卵を発掘しようと言うやつで、ホームステイする者は5歳から17歳の少年少女達で、募集制、どんな境遇の子供でも構わないって感じです。

浮浪者の子でも、貴族の子供でもなんでもござれなのであるもんだから結構集まる。

でも、審査があり、それを私達が見て判断する。

運良くホームステイしたとしても浮浪者の子は奴隷のような扱いや性処理の道具のような扱いを受ける。

まあ、私の領地にはちよっと草を撒いているんですけどね。

作者　ちよいと解説　メアンリの言う草とはスパイのことだよ！

解説ありがとう、作者。

そんなわけだなシヨタロリペドが見つかった瞬間爵位剥奪、という具合。

「さて、準備できた。みんな」

「姉様、後ろのリボンが結べません」「はいはい、カFINE、ちょ

つと後ろ向いて」

「その髪飾り貸してくれない、リーザ」「リリファのネックレス貸してくれるなら」

「うん、いいよ」 リーザ姉様とリリファ姉様は仲良くやつて
いる。だが、とりあえずさっさとしてほしい。2時間もやっている。

「ねえ、メアンリ、私その、に、似合ってるかな？」

「似合ってますよ、クロア姉様、ちりめん細工のリボンがあるので
それで髪をまとめますね」

「あ、ありがとう、メアンリ……」

クロア姉様、頬を染めながら微笑み浮かべるなんて、将来が楽しみ
になりますよ。私、ちよつとドキドキしてますよ。

「メアンリ、ネクタイこれでいいかな？」

「ああ、結べてないですよ、アレク兄様動かないで下さい」

「姉様、早く行きたい、ねえ、はーやーくー」

「急かさないの、フェルト、トイレとか大丈夫？」

「一応いつとくー！」

パタパタと駆けて行くフェルトを見送り一息つくと、スカートの裾
をくいくい引つ張る感覚がある。 「姉様、おやつ食べたい」

「ティア、我慢してお城についたら好きなだけ食べれるから」

「おやつ……うん……わかった……」

目に涙ためないで、良心が痛む。
しばらくして、「準備できた？」

「………はい………」

「準備出来ましたよ、母様」

「あら、じゃあ馬車で待ってる父様の所生きましょう」

……………なんでだろう……………私の兄妹達の立ち位置がオカンな気がする。

ビリイイ！！！！

「あら、どうでしょう？」

木に引っかった母のドレスが破れて薄緑のパンティーが顔を覗かせている。

「みんな、先に馬車に行つて、母様のお色直ししてくるから」

「わかった」アレク兄様が言う。

やっぱり立ち位置がオカンな気がする！！！！

そういえば、4年一度あるのになぜ兄様達が知らなかったのは、当時6歳の子供がともに審査できる？と言う理由です。

じゃあなぜ、私が行けるのだろう？
それが問題だ

馬車に揺られて（前書き）

魔法有りな世界です。

馬車に揺られて

はあー、やっと終わった！ 馬車に揺られながら一息つく。

「ごめんなさいねーメアンリ」

「いいんですよ。母様」

この人、「大丈夫よー。このまま行くわー」とか言い出したからびっくりするわー。パンティー覗かせているドレスとか、ハイセンス過ぎるよー。あんたがやったらアダルトビデオだよー！！

常人はついていけないわー…

父様はそんな所に惚れたんだ。と、ぬかしやがった。ドジッ娘萌か… あんた。眠くなって、うつらうつらとする。 馬車の

振動と日差しがいかんじに眠りに誘う。（疲労感もあってもう無理）

「あらー、寝ちゃったわねー」愛しい我が子の髪を撫でる。

馬車は二台あり、男性陣、女性陣に別れている。今ここにいるのはクロア、リリファ、リーザ、メアンリ、カFINE、私、の六人。

寝ている我が子がいつの日か「輪廻転生って知っていますか？」と言った日には、何のことかしら？と思っていたけど、話を聞いている内に、ああ、そういえばアレク、クロアが「おかあさまー、めあんりがえほんよんでくれたんだ！」

「めあんりがおやつつくってくれた」

なんて言っているのを思い出した。

そつえば、カFINEとフェルトはあんまり夜泣きしないわねえと言え、「めあんりがみてるからだよー」。なんて言っていたのを思い出した

いやあねえ最近物忘れが酷いのかしら？ あの時、ティアに付きつきりだったからあんまり真面目に聞いていなかったからかしら？

あの子が教えてくれる知識はとても役に立ち、あの頃あんまり休みの取れないギルジアが喜んでいたわねえ。

私もあの子が6歳の時にちょっと練習したいから付き合っただけと言われたなにかしらと、思っていたら薄い服？みたいのを着せられて、体を揉まれたわ。」「はあ、あっ、きつ、きもちいい。」「

と正直に感想を言ったら、「浮気か！！テレジア！！」とギルジアが慌てて部屋に入ってくるから、びっくりしたわあ。

それがあってメアンリは「まっさーじ」をしてくれなくなった。気持ちよかったのに！！

メアンリは他の子達の面倒を見てくれて助かったし、みんな、マナーが出来ていてびっくりしたわねえ。

あの子はお風呂が好きみたいでお風呂は無いのか！！と聞き、無いと答えたら、

ならば作るまでよと私達に許可を貰ってすぐに作っていたわ。

液体石鹸というのはいい匂いがしてるし、魔法で作ったお湯の入った浴槽はとても気持ちよかった。

そして、領地の事も考えていた。

食うものに困っている人はいるか、職をにっていない人はいるか、医者には掛かれない人はいるか、治安は良いか、

そんな事を聞いてどうすると聞けば、対策を練り上げて試してみたいのだと言われ、ギルジアと話し合いそれを試してみるとやりくりするので手一杯だったのがゆとりができて生活の幅が広がった。

それを知っている領地民はメアンリをすごいと言うが他の民が聞いて来れば、領主様が改善してくれた。皆口を揃えて言う。聞けばメアンリが頼んだそうだ。

なぜ、と問うと、「私は平凡な日常がいいんですよ」

と言う。精神的には大人で、でも愛しい我が子を撫でる。

神様、愛しい子ども達をありがとうございます。

夢と回想（前書き）

ハイハイ、テストで更新遅れました、十晴です。いつの間にかユニークが百人になっていました。

保存しないで消しちゃったり、卑猥になりすぎて修正したりして遅くなりましたが、

十・メ」どうぞ、楽しみ下さい。そして、ユニークしてくれてありがとうございます！」

夢と回想

んう、あら、私いつの間にか寝ていたのね。

「おや、目が覚めたようだね」

「…お久しぶりでしたね。管理人君。」

「小百合さん。それは止めてくれないかな？」

「名前が無いじゃない」

「小百合さんが決めてよ」

「あなたは神様じゃないの？」

「まあ、他にもいるしいいかなって」

「というか、ここは何処なの？」

草原だよ。爽やかな風が吹いているよ。

「もう一つ質問いい？なんで大きくなってるの？」

前にあった時は8歳位だったのがいまは20代の見目麗しい青年になっている。金髪が風になびいている。

「いや、ちょっと狙ってみようかなと思って」

「何を？」

「小百合さんには秘密」

「まあ、夢だよ夢」

「へえー、そうなんだ」

つまりこの空間の中は私達だけなんだ…。ニヤリ、ここに転生してからとんとご無沙汰だったんだよね。

「ちょっとお願いが有るんだけど…」

「ん、何？」

数分後、

「はあはあ、んっ」

「オヤオヤ、随分固くなってるねえ」

「…んっ、ああー!!」

「あら、口からよだれ垂らしちゃって、うれしいなあ。サービスしてあげる」

「はあっ！はうう！」

「……気持ちいいかな？」

「はい…ギモデイイです」

「……それじゃあ、ここをグリグリするよ」

「待つて！今はダメツ、あああつ！」

「…ねえ、マッサージだけでそんな喘ぎ声だすのやめて」

「はあはあ、もっと、はあ、シテクダサイ。」

イケメンが息乱しながら、上目使いで頬を赤く染めている。

ぶっちゃけていうとなんか反応が噓っぽいなあと思ってたけど、目に見えてウズウズしてる。

いや、整体師やってたから、腕が鈍ってたらずだなと思って久々に肩慣らしならぬ腕慣らししたくなってたから、管理人君にやってあげようと思って、やったらすげーリアクションする。

「はい！終わりだよ！随分凝り固まってたね」

「……………」

ボーっとしてる。

「そんなに良かったの？」

「……うん」

「ハーブティーを入れたんだけど飲む？」

「……用意するね……………」

ボンと出てくる辺りさすが夢だよ。

「リラックス出来た？」「うん。ものすごく、気持ちよかった」

「神様の名前さ…おもいつたんだけど」

「どんな名前かな」

だいぶ落ち着いたようだ。だが、目が眠そうですね。

「フエーゼでどうかな？」

「いいと思うよ。」

「んじゃあ、決定!!」

意外とあっさり決まったなあ。

いや、なんとなくだからね。

ちゃんと意見を交えて練り上げてつけようかなと思ったんだよ!?

そういや、前世で結構お馬鹿なギャルママになっている友達に「娘の名前と一緒に考えてえ」と泣きつかれたもんだ。だが、一緒にやって良かったと思っている。

…前世での1コマ…

「ねえ、この漢字可愛いからさ、使おうかなあ？」

辞書で調べている私にケータイの機能を使っている彼女は私にケータイを見せてくる。

「ん、どれどれ」

「……あんだ、娘にどうゆう名前にしたいわけ？」

その漢字は、【萌】とケータイに表示されていた。

…確かに意味を知らなければ可愛く感じるが、その読み方は「それの読み方は、にんにく、よ。幸^{さち}」

「ええええ!!ごめんねえ。小百合」

「はあ、幸は難しい漢字調べなくていいから」

「じ、じゃあ、これはどう!?!」

再びケータイを見る。

「却下」

「な、なんでえ…」

確かに小さい時はいいだろうが、

「乃惠^{のえ}瑠^るってなんだ!帝愛^{ていあい}良^らってなんだ!当て字にもほどがあらあ
!!!」

「だってグループにいた時はこうゆうのよく使ってたんだよあ…」

頭痛い…

「そっぴや、あんたレディースに所属してたわね…」

「うん」

「いい?よく聞きなさい。その名前で五十代になった娘を考えてみ
?」

数秒たって幸の顔が青ざめる。

「あまつさえもしその歳で事件に巻き込まれてテレビのテロップに名前が出たところ、想像してみ？」

「いやあああ！――！」

私だったらせめて、紫苑しおんにするわ……。

「でもさあ、小百合ってえ、おばあち「やめようか？」

「ごめんなさい！だから見捨てないで！ダーリンとの愛の結晶なのよあ」

「こちとら彼氏すらいないんじあー！」

「あたしの友達的美奈子とか見習えばいいじゃん！」

「給料の三分の二を合コンにつき込む位なら、いつその事私は見合いをする。」

「わかったから、今度焼き肉食べに行こ？」

「……奢りなら」

1時間後、

「ハア、ハア、よし、この子名前は、真理華まりかに、ハア、けっいい……」

あーだこーだやってたら段々白熱して来たんです。その時の一部分

「だからなんでやたら難しい漢字使うのよ!」

「いいじゃん!可愛く見えるんだから!」

「可愛く見えるとかそうゆう問題じゃねえ!!」
そんな事やってました。

「さて、チャーハンでも食べるか」

「あたしの分も!!」

「人ん家上がり込んで来て図々しいよ」

「じゃあ、お酒買って来るね」

「ちょっと待ってあんた妊婦なんだから辞めなさいよ?」

「わかりました…」

「つわりとか大丈夫?チャーハンやめとこうか?」

「大丈夫だよ。それにお腹すいてるしさ」

「そう?あつ、聞いてなかったけど何ヶ月目だった?」
「んと、もうそろそろ十月十日なるかな?」

「え?」

「あ、」

「小百合いゝ、驚かないでね。」

「まさか…」

「破水しちゃった…」

「きゅ、救急車あゝ!!」

「ヒッヒッフー！」

「なにお産の時の呼吸法してんの！」顔色が悪くなっている。

「あーもう、もうすぐ、くるから待っててね！それまで呼吸はなるべくゆっくりとするんだよ！ちよつとごめんね！」

横に寝かせた幸をお姫様抱っこして表に出る。

「整体師の腕力舐めんなあ！」表に出て2分位で到着した救急車に
乗せられて幸は病院に行った。ついでに旦那さんにも連絡した。
いやあ、大変だったねえ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2013y/>

メアンリとプレゼント・フレンズ（愉快的仲間達）

2011年12月3日19時49分発行